

日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域

会報

Vol. 28(3), November. 2024

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 学会参加報告①
- ♪ 学会参加報告②
- ♪ 定例研究会案内
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告！

巻頭言

「部活動の地域移行」について思うこと

森田 啓之（兵庫教育大学）

『部活動の地域移行』は、この数年、メディア等で様々な形で報じられ、教員や体育・スポーツ研究者だけでなく、保護者や関係団体も巻き込んで多くの人々が興味・関心を寄せるワードとなっている。令和2年9月の「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革」発表を端緒に、令和4年12月には「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」が公表され、翌年度からの3年間で「改革推進期間」と定められた。この方針を受けて、全国の自治体はその具体的検討に着手している。当然のことながら、私の勤務・居住する兵庫県、並びに関係市町においても昨年頃から検討会議が設置されて議論が行われている。ありがたいことに私は、県はもとより多くの自治体での議論に参画する機会をいただいております、その立場から思うことを少し述べさせていただきます。

今回の地域移行に当たっては、まず、「なぜ部活動をなくすのか!?!」という疑問と不満の声をよく耳にする。少子化で部活動が成立しないこと、生徒の文化・スポーツ活動に対する意識が多様化していること、さらには学校教員の働き方改革といった背景を知るにつれても、「頭では理解できるが、やるせない」という思いを特に大人（保護者、地域団体関係者、さらには教員も）が正直に吐露する場面にしばしば遭遇する。彼らの多くは部活動で良くも悪くも様々な経験したことを思い出として「身体化」しているのであり、それが無くなることに対する独特な感情が湧いているのであろう。我々の「部活動観」が我々個々人の身体に染み付きながら伝播してきたことをしみじみ痛感する。

しかしながら一方で、私は今回の劇的な制度改革について、「英断であり、国・スポーツ庁はよくぞ決断した」と捉えている。なぜなら、部活動が抱える様々な問題（特に、部活漬けや体罰等の指導や運営のあり方）が継続して叫ばれてきたことに対し、「クラブの本来性を取り戻せ」といった主旨の指摘がこれまで多くなされてきたが（近年ではその代表は関西大学の神谷 拓氏であろう）、ここまで肥大化・過熟化した部活動を見直す大きなうねりにはなっていない。その意味では、思い切って制度・枠組自体を変え、「新しい器に新しい水を入れる」策として評価に値すると捉えている。さらに、中・高生の部活動についてはこれまで大きな意義・役割を果たしてきたことを認めつつ、我が国の「生涯スポーツ文化」形成という観点で中抜け期間（6年間）を作り出してしまったことも事実であり、今回の大改革には前向きな期待を少なからず寄せている。

しかし、その取り組みを見ると、「指導者の発掘」や「受け皿団体の確保」といった『方法』論に目が行きがちであることには危機感を覚えている。もちろん、それらは生徒たちに部活動に代わる場を整備していく上で大切であるが、それ以上に（以前に）重要なことは、「これから求めるべき青少年期の文化・スポーツ活動の姿」や「新たな文化・スポーツ環境の具体的なイメージ」をどう描くかである。すなわち、地域移行・地域展開の『目的・目標』論をしっかりと議論して、その理念をすべての関係者が共有すべきなのである。このような思い・考えを保持しながら検討に関われるのは、原論分野でこれまで議論してきた経験があるからこそと、若い頃からこれまで育ててもらった諸先生・先輩や同僚に感謝をする日々である。

最後に、地域移行について一言付け加えさせていただきたい。今回の改革が進む数年間で、「今までのような」部活動、すなわち、平日4日・休日1日に皆が同じように活動をする風景は、徐々に姿を消していこう。しかしながら、それは学校におけるクラブ活動経験が不要であることとイコールではない。これまでの部活動の「当たり前」を脇に置いて、今の学校の中で「本来のクラブ活動」をどのように設置し直すことができるかが、地域移行と並行して議論されることを願っている。

森田啓之 (hmorita@hyogo-u.ac.jp)

体育哲学考

デジタル人材育成と体育哲学について

～ 専門領域からの問いとは ～

中田 裕一（大阪公立大学工業高等専門学校）

体育哲学考を考えるうえで、大学を卒業し就職仕立ての頃、運動事象の本質を理解することの大切さを学習者へ伝えることに張りきっていたことを思い出すことができた。現在もその姿勢をなんとか保っていると自己評価しているが、情報化社会の充実により、日本の進むべき教育の方向性を確認できるようになってからは、何か漠然とした問題意識が現れた。

内閣府は、我が国が目指す未来社会の姿「Society5.0」として次のように提言してる。

- サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会 Society 5.0 - 科学技術政策 - 内閣府 (cao.go.jp)
- IoT、ロボット、人工知能 (AI)、ビッグデータ等の先端技術をあらゆる産業や社会生活に取り入れ、格差なく、多様なニーズにきめ細かく対応したモノやサービスを提供 society5_0.pdf (cao.go.jp)

令和5年3月8日に開催された中央審議会では、次期（第4期）教育振興基本計画の中で「教育デジタルトランスフォーメーション (DX) ^{*1}の推進」が教育政策に関する基本的な方針のひとつとして記載されている (000219113.pdf (mext.go.jp))。

近年、このような国の方針を実現するために、学校教育現場では、デジタル成長分野を支える人材育成が急務とされるようになった。

文部科学省は、このデジタル成長分野を支える人材育成の取組みとして、DX 推進事業、デジタル時代の「読み・書き・そろばん」である MDASH (数理・データサイエンス・AI 教育プログラム) ^{*2} など、大学 (短大含む)・高専 (高等専門学校)・高校に対し、データ思考の涵養を推進している^{*3}。

更に付け加えれば、デジタルデータの利活用だけではなく、新しい価値を創造できるような人材を育成することが、現在日本で求められている教育ということになる。

学校教育現場では、学習指導要領における保健体育科の独自性を鑑みることが必須であり、運動場面（スポーツ場面）においてもデジタル化による分析・シミュレーションや最適化といったアプローチが進歩し学習者（プレイヤー）自身もそれを利活用していることに疑う余地はない。学習指導要領もデジタル人材育成も国が掲げる方針として、同じ教育現場に共存していることになる。あるいは、共存というより位相の異なる教育活動として現れているのだろうか、、、

わたしの所属する少しニッチな工業高等専門学校（全国で国公立 58 校）では、国の方針に敏感に反応し、教育活動が行われている（特にデジタル利活用人材育成に係る取組みが重要視されている）。

漠然とした問題意識とは、教育活動としての「デジタル利活用できる人材育成」と「身体が関わる運動領域（体育）」とがどのような関係性であるべきかに起因する。

学習指導要領（保健体育）に沿った、体育独特な教育活動の中にデジタル技術を利用した取組み（指導・学習）へと変化させていくことが良い教育活動になるのだろうか、、、あるいは、これまで通り運動事象を対象とした独自路線でいいのか、、、国の方向性を鑑みなくてもいいのか、、、

工業高等専門学校という教育環境において、改めて体育教師としての姿勢を考えさせられている。

※1 DXとは「デジタル技術とデータを活用し、既存のモノやコトを変革させ、新たな価値創出で人々の生活をより良くすること（内閣府が描く未来社会「Society5.0」に見る「人間中心の社会」とは - DXportal (dx-portal.biz)）。

※2 リテラシーレベルでは、大学・高専卒業生全員が初級レベルの数理・データサイエンス・AIを習得することを目指す（応用基礎レベルでは高校の一部も含まれている）（数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度：文部科学省 (mext.go.jp)）。

※3 2024年4月には、高校段階でデジタル等成長分野を支える人材教育として「高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）」採択校が決定（1,010校）した（高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）：文部科学省 (mext.go.jp)）。

中田裕一 (y.nakata@omu.ac.jp)

書籍紹介

千葉雅也（2024）『センスの哲学』（文藝春秋）

高岡 英氣（敬愛大学）

著者は冒頭で、本書が「センスが良くなる本」であると述べ、一旦は軽薄な印象を与える。しかし、その射程は芸術の鑑賞眼にとどまらず、より広く「ものの見方」全般に及んでいる。

センスとは何か？著者によれば、それはものごとを「リズム」として捉えることである。美術、音楽、映画、文学から衣服や料理にいたるまで、ものごとは形、色、響き、味、触感といった様々な要素から成り立っているが、それらは抽象化すれば「デコボコ」した「形」の集合として捉えることができる。芸術であれば、作品の意味や目的ではなく、それを構成するデコボコそのものを「リズム」として捉えることがセンスの芽生えである。

そして、こうした「リズム」には二つの側面がある。ひとつは0→1のように、何か「ない」＝不在から、「ある」＝存在への切り替わりとしての「ビート」であり、もうひとつは複雑にさまざまな側面が絡み合った「うねり」である。著者が例示するラウシェンバーグの絵画が示すように、細部においてはいたるところで長い線／短い線、濃い色／薄い色と

いった存在／不在の対立があり、そうしたディテールが複雑に絡み合って大きなうねりが生み出される。「リズム」は、こうした対立のビートと複雑なうねりの両面から捉えることができるのである。

さらに、小説や映画といったジャンルにおいて重要となる「意味」についても、リズムとして捉えることが可能だという。たとえば、「熱い」と「赤」、「血液」、「勇気」といったものは近いものとして連想的に集合をなす。一方、「熱い」と「冷たい」は対立して遠い関係にある。このように、「意味」は近い／遠いという「距離」の視座から理解することができ、それゆえに「意味のリズム」という捉え方が可能になるのである。この「意味のリズム」においても対立のビートと複雑なうねりという二重の見方ができる。

このように、著者はあらゆる表現をビートとうねりからなるリズムとして捉えることにセンスの本質を見ている。

さて、リズムが芸術作品を構成する要素＝デコボコであるならば、作り手のセンスはそれをどのように並べるかに関わる。そこで重要となるのが「差異」と「反復」である。たとえば、映画における「モンタージュ」は、構成要素である「ショット」の並べ方と言えるが、そこには一定の反復がある一方で、時に反復からの外れ＝「差異」が生じる。芸術において、そうした差異の大きさは、たとえばゴダールの映画における不合理なショットの飛躍のように、鑑賞者に不快かつ快であるような刺激を与えることでラカ的な「享楽」をもたらす。センスは、ある程度の反復があり、差異が適度なばらつきで起きるというリズムのバランスに宿るのである。

だが一方で、小説家における文体や繰り返されるモチーフのように、往々にして芸術作品には、作者のもつフロイト的な意味での「デモーニッシュな反復」がにじみ出る。著者はこれを作者が人生を通じて背負った「問題」の表現とみる。その反復は必然でありながら、根底には偶然性が響いている。こうした「問題の反復」は、センスの良さとしてのバランスを食い破るような、いわば「アンチセンス」である。だが、センスは、こうしたアンチセンスという陰影を帯びてこそ、真にセンスとなるのではないか。著者はそのように本書を締めくくるのである。

著者も言及しているように、本書のいうセンスとは、換言すれば芸術論というフォーマリズムの視座からものごとを捉えることである。われわれのスポーツ哲学やスポーツの美学の領域においても、フォーマリズムの観点から競技者の運動形式やプレイスタイルが論じられてきたと思われる。本書で著者が示したセンス／アンチセンスの捉え方は、そうした議論に対しても有益な示唆を与えるものではないだろうか。

高岡英氣 (h-takaoka@u-keiai.ac.jp)

私の研究

スポーツ文化論の構築に向けて

河野 清司 (至学館大学)

これまで、スポーツの文化論的研究に取り組んできました。現在、三つの問いに取り組むことにより、スポーツ文化論の構築を目指しています。

まずは、「文化とは何か」という問いです。これに関しては、エルンスト・カッシーラーのシンボル論に着目しています。カッシーラーによれば、人間は「シンボリック・システム (象徴系)」によって構築された世界に住んでいます。このシステムは、フォン・ユクスキュルが明らかにしている「動物の機能的円環 (Funktionskreis)」と対置されます。生物においては、体の構造に応じて、反応すべき刺激と反応の仕方が決定されています。これに対し、人間においては、刺激と反応の間に人為的媒介物たるシンボリック・システムが介在しており、言

語、神話、芸術、宗教がこの構成要素となっています。カッシーラーは、人間は「言語的形式、芸術的形象、神話的象徴または宗教的儀式中に、完全に自己を包含してしまったゆえに、人為的な媒介物を介入せしめずには、何物をも見たり聴いたりすることはできない」としています。つまり、視覚から聴覚にいたるまで、文化的形式の枠組みが介在しています。例えば、われわれにとっては虹の色が七色として覚知されるのに対し、ある文化圏で育った人々には三色として覚知されることから、知覚自体が当該文化圏の言語形式の媒介を受けていると考えられます。このことは、知覚における〈意味〉の「プレグナンツ（受胎）」と関連しています。われわれの知覚には、特に言語的〈意味〉が組み込まれており、その形式を通して特定の覚知が行われていると考えられます。

つぎに、「文化を構成する媒介的契機とは何か」という問いです。この問いに取り組むため、廣松渉の「四肢的構造」に着目しています。現相的「所与」はそれ以上・以外の「所識」として覚知されます。例えば、われわれにとっては、犬の鳴き声は「ワンワン」と聞こえてきます。それでは、この事態はだれに帰属するのでしょうか。つまり、「所与」が「所識」として覚知されるという客体側の事態に対し、それが妥当する主体が問題になります。犬の鳴き声が「ワンワン」として覚知されるのは、アメリカやヨーロッパの文化圏で育った人ではなく、まさにわれわれ「日本人一般（能識者）」として自己を形成してきた「私（能知者）」にほかなりません。このような「所与-所識」「能知-能識」からなる四肢的構造の機能的連関態として文化的世界を捉える必要があります。

さらに、「文化を変える力とは何か」という問いに取り組む予定です。この際の鍵となるのが丸山圭三郎の「文化的欲望」という概念です。

以上の研究をスポーツの文化論的研究に援用することによって、スポーツ文化論の構築を目指しています。まずは、スポーツを他の文化と同じく、シンボル形式として位置づけることです。そのための鍵となるのが、スポーツ的〈意味〉であると考えられます。例えば、野球における1アウト、3塁の場面において、外野方向に飛んだ特定の打球は〈タッチアップ〉可能なボールとして覚知されます。この〈タッチアップ〉は野球独自の意味であるだけでなく、攻撃側および守備側選手の知覚においてまさに「プレグナンツ」されています。それでは、この覚知はだれに帰属するのでしょうか。野球やソフトボールの経験者、あるいは観客にとっては、特定のボールが〈タッチアップ〉可能なボールとして覚知されますが、野球を知らない文化圏の人々にとっては、特定のボールを〈タッチアップ〉という意味で覚知することができないでしょう。このように、特定のボールを〈タッチアップ〉可能なボールとして覚知する主体とは、「競技者一般」として自己を形成してきた個々のプレーヤーであると考えられます。タッチアップ可能であるにもかかわらず、それをしなかった選手に対し、「野球の競技者であれば、タッチアップしたはずだ」という批判をした場合、その人は「競技者一般」を僭称するかたちで当該プレーヤーを批判していることとなります。このように、廣松の四肢的構造論をスポーツの世界の構成に適用することが現在の課題です。つぎに、身体的卓越性を指し示すシンボル形式としてスポーツを捉えた場合、その形式は多元的であると考えられます。それでは、その多元性や可変性を生み出す原動力はどこにあるのでしょうか。スポーツ文化を変えていく諸力の一つについて述べるならば、既存のスポーツ文化では満足することのできない人々の欲望にあると考えられます。例えば、「日本において、あるいは世界において最も速い男・女になりたい」という文化的欲望をみたしてくれるのが陸上競技の100m走です。しかし、既存のスポーツでは満足できない人々があります。近年のスポーツクライミングやブレイキンの誕生は、新たな文化形式において身体的卓越性を示したいという文化的欲望の産物であると考えられます。

河野清司 (konok@sgk.ac.jp)

第 25 回世界哲学会議（The 25th World Congress of Philosophy）が予定通りではなく、イタリアの首都ローマで行われた。というのは前回 2018 年北京大会の参加報告（当「会報」第 22 巻 3 号、5-6 頁）末尾にて筆者が記したように、本来は昨年 2023 年夏に豪州メルボルンにてこの学会が開催される予定だったからである。場所と会期が変更された事由はこの間の世界情勢に照らしてもはや明らかであるから、小欄で敢えて縷説するには及ばない。以下では我が盟友の哲学者である坂本拓弥（筑波大学）、および気鋭の新進である中野大希君（同）と共に参加した——尤も両君と会場で相見える機会は逸したけれども——この巨大な国際学会の所感を記すことで不参加者への挨拶に代えたい。

哲学はいま、新たな問題領域を求めて彷徨する。哲学史研究の作法や古典文献の精読など正規の哲学教育を躰けられた者にとって、今大会のプログラムを一瞥していささか奇異の念に囚われたとしても不思議ではない。というのも大会参加者の多数に討議を求める「全体会 Plenary session」のテーマには、「脆弱性と学知 Vulnerability and Knowledge」、あるいは「生物多様性とその環境 Biodiversity and the Environment」などおよそ哲学の課題としては見慣れぬ標語がこれこそ新たな議論の地平だ、と言わぬばかりに列記されていたからである。現に筆者が参加した Plenary の一つ「持続可能な世界における生 Living in the sustainable world」に展開された議論は、地球環境の現状や景観の保護、果ては核抑止力の課題など分野で言えば「環境社会学」を彷彿させる。学会規模で見たこれら企画の背景には、研究課題の多くを社会科学と自然科学に奪い取られた哲学がその再興を図るべく、苦悶しながら歩み行く実情を窺うことが可能である。「哲学はいま、何を問えるか」。吟味に値する問いと違って間違いない。

個別の研究発表は玉石混交である。資料もスライドも用意せず誰一人聴講する気配もなきまま自らの用意した原稿をただ読み上げるだけ、といった笑止愚昧な報告や発表の無断欠席といった逃亡行為が多々見られたのは事実である。他方、敬意ある聴講に値したのは古典テキストの原文とその英語訳の並列表記、加えて発表者の意図や関心が直ちに了解できる画像や関連の資料を適宜提示するなど、聴講者の関心を適切に予測した発表は、いま思い起こすに何度でも新たな学びの得られるものであった。

以下に二つ記しておきたい。第一に、今大会におけるスポーツ哲学部会の低調に対する深い懸念である。某日午前百五十人程度が収容可能な会場に入ると、何やら数人だけが教室の前面に散らばり英語と思しき言語で呟きを交わしている。さては会場を間違えたかと認めて場所を改めて確認し、会場の係にもなお確認のうで大いに吃驚した。思わず目を背けたくなるようなこの哀れな光景こそ哲学業界における「スポーツ哲学」の現状なのだ、と。スポーツ哲学部会は一日同じ教室を借り切っていたようだが、この信じ難い状況は時間が経過してもなお変わらない。筆者の愕然は昼前に戸惑いへと変わり、午後には強い退屈と寂しさを覚えてこの会場を後にした。時代を画すべく鬨の声を上げて現状を批判し先人の乗り越えを試みる若手ほどの分野にも伏在するものだが、スポーツ哲学分野についてはこの現状（惨状？）に背を向けた欠席の若手研究者に責あり、と言えは過言であろうか。

口直しに向かった先は、わが私淑の大哲である今道友信が所長を務めた IIP（Institute Internationale de Philosophie：国際哲学研究所）の部会である。自らを秘匿する如く会場最深部の一室を借り切った業績選抜によるこの哲学者集団の討議は、筆者がこの会期中に直面した数々の失望を一挙に消し飛ばしてくれた。飛び交う多言語、哲学史研究と文献精読の確かな訓練に裏付けられた鋼のごとき論証の確かさ、不用意な発言を一言も許容しないその峻厳な言葉の取り交わしは、哲学を志す者が範と仰ぐに十分な学究の尊厳とその論拠を遺憾なく来場者である筆者に示してくれた。

さて、次回 2028 年の開催地は東京であるが、今一つ懸念がある。発表者を収容する部会総数が前回 2018 年大会から今大会にかけ、数にして十ほど削られている。おそらくは参加者の見込めぬ将来性なき部会を主催者が抹消したのであろうが、スポーツ哲学部会も上記の通り極めて不況であるから、次回の東京大会では消滅の可能性も考えられる。筆者は今大会に教育哲学の部会で発表したからこの問題を脅威とはしないが、「もしスポーツ哲学の部会がなかったら」、この分野の次代を担うスポーツ哲学の若手諸氏は一体どの部会で発表するのであろうか。勘考の迫られる時宜である。

林洋輔 (qqfs3s79@bridge.ocn.ne.jp)

学会参加報告②

日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会

岸井 貴春（筑波大学大学院）

日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会が 2024 年 8 月 29 日から 31 日の日程で福岡大学にて開催されました。今年度は前半 2 日が完全オンライン、最終日が現地とオンラインのハイブリッド形式という変則的な開催となりました。その原因は感染症ではなく、自然災害でした。台風第 10 号（サンサン）が九州に上陸し、全国的（特に西日本）に新幹線や航空便の運航に支障が出ていました。簡単な状況ではありませんでしたが運営の対応力には驚かされました。この場を借りて感謝を述べさせていただきます。

私は関連学会の日本体育・スポーツ哲学学会大会が同月 24・25 日に岡山で開催されていたこともあり、そのまま福岡へ早くに移動していたため、移動に不便はありませんでした（ただし帰りは名古屋で足止めされました）。また滞在中は、幸いにも荒天に襲われることはありませんでした。研究発表は福岡のホテルからのオンライン発表になりました。2 日目の応用研究部会（スポーツ文化研究部会）にて「大学にとって運動部とは何なのか：関東に所在する一国立大学の規程に基づく考察」という題目で一般研究発表を行いました。部会の課題は「継承されてきたスポーツ文化を問い直す」であり、それに倣って大学運動部という当たり前に存在する集団について、大学規約などの成文化された文書に基づきその根拠（の不在）を問い直しました。幸いにも質問をお寄せくださる先生方が複数おられ、応答を通して「大学スポーツ」というトピックへの関心の高さと、他領域との考え方の違いを痛感いたしました。

本部企画シンポジウムでは、過去 3 年間の領域横断の取り組みへの振り返りが行われました。そこでは、領域横断に関する会員間での情報の多寡の差やそれに伴う温度感の差が課題として指摘されました。横断企画がスタートした 2021 年はオンラインだったものの筑波大学開催であり、私は裏方としてその反応を知る機会に恵まれました。そこでも応用や横断の重要性は各々が認識しているものの、取り組みの実情に満足していないようでした。私見を述べますと、応用研究部会では同じセッションに少なからず近い関心を持った発表者が集められているものの、その交流はひいき目に見ても盛んであるとは思えません。むしろ、自身の発表だけ済ませて会場を去るという姿だって珍しくはないでしょう。知というものは他人との議論によって洗練されていくものだとは考えています。それは論文を通じた時空を超えた議論にも、時と場所を共有する議論にも共通するでしょう。たしかに他人と研究を相互に理解するという事は難しく、読み取りと伝達の努力が大きく求められるでしょう。だからこそ私たちは 10 年近くも読み書きの練習に歳月を費やし、学位を目指すのかもしれない。しかし、研究者同士ですら議論を諦めてしまっただけでは、社会に通じることなど夢のまた夢です。議論の相手を選び好んでいては人と人の乖離は進むばかりです。

思えば、私が大学運動部を研究対象としようとしたのも、競技的な部が大学のスポーツ資源を独占といえるほど優先的に使用し非所属者との間でスポーツへのアクセスに大きな格差

を生んでいるにも拘らずそれが問題として議論されず等閑にされていることへの疑念からでした。それどころか対外的に活躍する競技活動は真面目な活動として格上げされつつあり、議論はより封殺あるいは忙殺されるかもしれません。私たちが社会の中に生きている以上、もっと言えば隣に誰かがいる以上、そこには議論の可能性と必要性があるということに真摯に向き合う必要があるでしょう。そこで、横との交流や用に応ずることも忘れず研究に励み、一人の声ある人間として生きていけるよう努めていきたいです。そして、学会大会や、学会自体がより実のあるものに成長していくことを願うとともに、私もその一葉として雨風を凌いだ後に見える燦爛と照る日の光を待ちたいと思います。

岸井貴春 (kishii.dec@gmail.com)

定例研究会

第2回定例研究会のご案内

佐々木 究 (京都産業大学)

日程 : 2024年12月7日(土) 14:00-15:30

本会は、【対面形式】と【オンライン・リアルタイム配信(zoom)】によるハイブリッド型で開催します。各自のご希望、ご事情にあった形式でご参加ください。

【対面形式】

会場 : 筑波大学 東京キャンパス 432 会議室
東京都文京区大塚 3-29-1

注意事項 :

対面会場では、eduroam をとおして施設のネットワーク回線が利用できます。

それ以外の方は、施設のネットワーク回線を利用するために事前の申込みが必要です。利用を希望される方は下記のフォームから期日までに申込みをお願いします。

ネットワーク利用申請

Google Forms : <https://forms.gle/iCShQsXRjaWEL53V9>



またはこちらからの QR コードから⇒

〆切 : 2024年12月4日水曜日 24:00

問い合わせ先 : 深澤浩洋 (筑波大学) fukasawa.koyo.gu@u.tsukuba.ac.jp

【リアルタイム配信】

接続方式 : zoom

注意事項 :

リアルタイム配信の閲覧情報はメーリングリストでお知らせします。メーリングリストへの登録をお願いします。会員以外が閲覧する場合は、会員から研究担当にご連絡ください。また参加者は当日実施する出席調査(Google Forms)に記入をお願いします。

【プログラム】

14:00 代表挨拶 深澤浩洋 (筑波大学)

14：05 研究発表① 浅田風太（東海大学大学院）・阿部悟郎（東海大学）
体育の教育的可能性の一端に関する検討：R.ローティの教育学に基づいて
【概要】

本研究の目的は、デューイ以後のネオ・プラグマティストに位置付けられるリチャード・ローティの教育学に基づき体育の教育的可能性の一端を検討することである。ローティは、デューイの教育学を継承しつつも、その革新点として教育における「社会化」と「個性化」の過程を重要視している。ローティは、そのような過程を経て子どもたちの自己創造を促すことを重視している。

本研究では、この教育における「社会化」と「個性化」の過程に焦点をあて、体育の教育的可能性の一端を検討したい。

14：40 研究発表② 水島徳彦（小田原短期大学）
子どもの遊びの可能性に関する一考察：フレーベル教育学を手がかりに
【概要】

本発表では、いわゆる子どもの運動遊びの可能性について検討する。その根底にある問題意識は、昨今、言われているような環境の変化やテクノロジーの変化による子どもの遊びの変容という問題を受けてというよりもむしろ、遊びそれ自体がもつ様々な可能性に回帰し、その積極的意義を探求しようとする試みである。そのための手引きとして、本研究ではフレーベル教育学を手がかりとする。

15：15 副代表挨拶 関根正美（日本体育大学）

【問い合わせ先：研究担当】

佐々木究 sasaki9@cc.kyoto-su.ac.jp

阿部悟郎 gr-abe@tsc.u-tokai.ac.jp

事務局より

田井健太郎（群馬大学）

○ 会員の訃報

2024年10月19日に京都教育大学の林英彰会員（享年64才）が逝去されました。これまで体育哲学専門領域事務局、運営委員、監事などの役職を長期間に渡ってお務めいただき、本専門領域の運営体制を整備することに多大な貢献をいただきました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

○ 日本体育・スポーツ・健康学会大会について

8月29日から8月31日にかけて開催された日本体育・スポーツ・健康学会第74回大会につきまして、本領域のプログラムは全て無事に終了いたしました。関係者の皆様にお礼申し上げます。会期中に開催された総会の議事録は次号の年報に掲載いたします。また、今年度の学会賞を久保正秋会員が受賞されました。おめでとうございます。なお、来年度の学会大会は、日本体育大学（2025年8月27日～8月29日）で開催されます。

○ 『体育哲学年報』投稿依頼

『体育哲学年報』第55号（令和6年度：2025年3月末発行予定）の掲載原稿を募集致します。研究会・学会での発表等を『年報』に投稿いただけます先生におかれましては、下記の

担当者連絡先までご一報いただき、原稿をお寄せください。投稿締め切りは2025年1月末日を予定しております。会員の皆さまからのご投稿をお待ちしております。

担当者連絡先 神野 周太郎（編集幹事） j.shutaro@gmail.com

○ 体育哲学e事典の公開について

2024年9月1日にe事典編集WGが中心となって取り組んできたe事典が公開されました。

サイト <https://sites.google.com/pdpe-jspehss.org/pdpe-encyclopedia/>

ご執筆くださった皆様に感謝申し上げます。会員を問わず、皆様からお目通しいたいただき、良質な事典となるよう更新してまいります。新たな記事も募集しておりますので、e事典編集事務局担当までご連絡ください。

○ 専門領域メーリングリストへの登録と『会報』の郵送廃止について

2024年度より（一社）日本体育・スポーツ・健康学会に登録されております会員メールアドレスを随時専門領域メーリングリストに登録させていただくことになりました。専門領域メーリングアドレスへの登録を望まない会員におかれましては、事務局までご連絡下さい。メーリングリストへの登録更新作業は年4回程度行っています。専門領域への入会またはメールアドレスの更新後6ヶ月がたってもメーリングリストから配信がない場合は事務局までご連絡下さい。

また、『会報』につきましてはこれまでメールアドレス登録のない会員には郵送でお届けしておりましたが、速報性、経済性、担当者の負担軽減の観点から、メーリングリストおよび専門領域ホームページ（<http://pdpe.jp/>）での配信のみとさせていただきます。専門領域メーリングアドレスへの登録を望まない会員、Web閲覧などの環境が確保できない会員におかれましては、事務局までご連絡下さい。

○ 住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、（一社）日本体育・スポーツ・健康学会事務局（<https://taiiku-gakkai.or.jp/admission>）にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。

次号予告！

次号も本専門領域関連情報をお届けする予定です。投稿を下さいます方は、広報担当：荒牧（ai.aramaki@cc.musashi.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第28巻第3号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域

深澤浩洋（代表）

編集者 坂本拓弥、荒牧亜衣、石垣 健二（広報担当）

発行日 令和6年11月8日

連絡先 〒371-8510

群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地

群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付

電話：027-220-7326

【編集後記】

今年は例年以上に残暑が続いた一方で、各地で深刻な豪雨の被害もありました。そのような中、今号も会員の皆様にお届けすることができ安堵しております。ご多忙の中、原稿をお寄せくださった先生方に改めて感謝申し上げます。また、去る9月14-15日には、コロナ禍以降オンライン開催となっていた合宿研究会が、5年ぶりに名古屋にて対面復活を果たしました。箱根の地で紡がれた様々な記憶を引き受けつつ、これから体育哲学の新しい記憶をつくっていくことも、私たちの重要な仕事であると思いを新たにしました次第です。(S)